

袋井市歴史文化館特別展

徳川家康公と 袋井ゆかりの武将・寺社

可睡斎徳川三つ葉葵金箔瓦



可睡斎家康公神像

袋井市歴史文化館

家康公直筆のサイン

はじめに

本年は徳川家康公没後400年顕彰の年にあたり、家康公が袋井に残した足跡をたどる展示会です。地元武将で家康公の有力家臣であった久野氏、本間氏、小笠原氏、さらに可睡斎や西楽寺、法多山、油山寺、木原権現社など、家康公とゆかりのある武将・寺社の歴史資料を多数展示します。なかでも本間家文書などの初公開史料、可睡斎金箔瓦など市内に残る家康公に関係した武将や寺社の歴史資料のほとんどが一堂に会する初の展示会です。

袋井における家康公の足跡

永禄3年(1560)桶狭間合戦で今川義元が織田信長により討たれると、家康公は今川氏から離れ、永禄5年信長との同盟を結び、名前も松平元康から家康に改名しました。これより後の家康公は三河統一を開始し、今川氏からの独立を画策するようになりました。永禄9年(1566)家康公はついに三河統一を成し遂げ、朝廷から徳川姓を賜りました。一方義元亡後家督を継いだ嫡男今川氏真の権威は次第に衰え、遠江の支配も揺らいだため、永禄11年(1568)家康公は武田信玄と呼応して、遠江に進攻しました。翌永禄12年信玄の攻撃を受けた氏真は、駿府館から遠江の掛川城に逃れるも、掛川城を包囲した家康公に降伏しました。元亀元年(1570)ほぼ遠江を支配下に置いた家康公は、居城を岡崎から浜松(曳馬)城に移しました。

袋井市域が家康公の支配下に入るのは、所領安堵状によると久野氏が永禄11年(1568)、本間氏は元亀2年(1571)以後、小笠原氏も永禄12年の氏真降伏以後は家康公に従ったと思われます。ところが、元亀3年突如信玄は遠江に進行しましたが、あえなく三河にて病没しました。信玄死亡後は後継者の武田勝頼が奮戦し、天正2年(1574)北遠の武將たちを味方につけ、信玄も落とせなかった高天神城を奪取しました。この時家康公方の本間氏清・丸尾義清兄弟が討ち死にしたと伝えられています。これ以後久野氏は家康公、本間氏と小笠原氏は武田氏の家臣となり戦うことになりました。

天正4年(1576)長篠合戦で織田・徳川連合軍に敗北した勝頼は、遠江での劣勢が始まり、天正9年(1581)家康公はついに高天神城を落城させ、翌天正10年武田氏の滅亡、本能寺での明智光秀謀反による信長の討死、北条氏との戦いにも勝利して、三河・遠江・駿河・甲斐・信濃の5ヶ国を領する大大名となりました。ところが、天正18年(1590)豊臣秀吉が天下統一を成し遂げると、家康公は秀吉の命で関東移封、旧領地は豊臣大名の支配地となりました。家康公家臣として唯一残った久野氏も家康公と共に関東の下総佐倉の地へ移封、袋井市域での家康公の支配が終わります。



写真1

家康公銅像

家康公の出世城とされる浜松城内に建てられた銅像です。冑の飾り金具である勝草とされる「羊歯」を掲げています。



写真2

家康公神像

束帯姿で、上座に座った神君東照大権現としての家康公の神像です。天海大僧正により神格化され、可睡斎でも位牌と共に絵画としての神像を祀ったと思われます。(可睡斎所蔵)

家康公に最後まで従った久野氏

久野氏は久野氏家系図によると、藤原南家を先祖とし、工藤氏の末裔としています。系図から久野氏先祖を辿ると、鎌倉時代初期の清仲三男の宗仲は、久野六郎、遠江住人で久野氏祖とされています。ちなみに長男は清行、原四郎で原氏祖、次男は橋爪五郎と書かれています。このことから、鎌倉時代において久野氏は原氏に連なる有力武将であったことが分かります。また、久野氏の存在を直接示す古文書としては、中尊寺文書の中に弘安年中(1278~86)中尊寺経蔵別当朝賢が遠江在住の久野四郎兵衛の子乙増丸に職を譲った事が記載されたものがあります。

戦国時代の久野氏の動向は、久野城の発掘調査の成果から見ると、出土した陶磁器より明応年間(1492~1500)築城説が裏付けられ、初代城主は宗隆であったと考えられます。その後の城主の元宗が今川義元と共に桶狭間にて討死したため、城主は宗能に引き継がれました。永禄11年(1568)家康公は宗能と子の千菊丸に所領安堵状を与えているため、久野家系図で伝えられる家康公の掛川城攻めの際、不入斗の陣(富士浅間宮か)に参陣した事を裏付ける史料とも思われます。また、永禄12年の家康公が宗能の忠節を褒め称えた書状については、久野一族のうち今川氏真の味方になった者たちを一掃した宗能の功績を認めた史料と思われます。

この後、元亀3年以降の武田信玄と勝頼の遠江侵攻戦の際にも、宗能は首尾一貫として家康公に仕え信頼を得ることができました。天正18年(1590)豊臣秀吉により家康公の関東移封が命ぜられると、宗能も佐倉1万3千石で移封となりました。慶長5年(1600)天下分目の関ヶ原合戦で勝利した家康公は、慶長8年征夷大將軍に任ぜられ江戸幕府を開いた年に、宗能は隠居所としての久野城を再び賜りました。故郷を終焉の地としたかったのでしょう。

宗能は慶長14年(1609)病没し、孫の宗成が後継者となりました。慶長16年宗成が油山寺三重塔の相輪伏鉢に、寄進した銘文が残されています。また、油山寺略縁起には家康公のために梵鐘を鑄つづして鉄砲玉を提供したことが記されており、久野氏と共に油山寺も家康公に協力したことが伝えられています。



写真3

写真3 久野城遠景(南西より)

城の周囲は湿地に囲まれた天然の要害地にあり、武田氏などの攻撃をうけても一度も落城したことはなかった難攻不落の平山城です。

写真4 油山寺三重塔

慶長16年相輪伏鉢に宗成が寄進した銘文があります。戦国時代末期の見事な三重塔です。また、油山寺には久野城で没した宗能の位牌もあります。



写真4

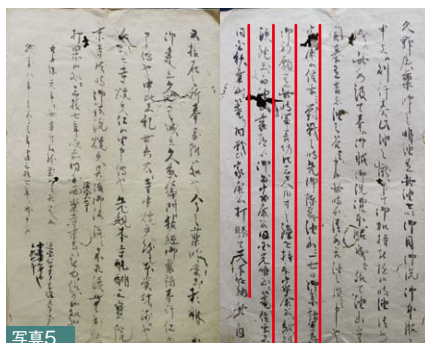


写真5

油山寺略縁起

享保元年(1716)に書かれ、文化8年(1811)に書写したものです。家康公が信玄と戦い、戦勝祈願のため油山寺を訪れた際、3尺2寸(約96cm)の鐘を鑄つづし鉄砲玉を提供し、その後家康公は光明山、信玄は秋葉山に籠もり家康公が勝利したと書かれています。(油山寺所蔵)

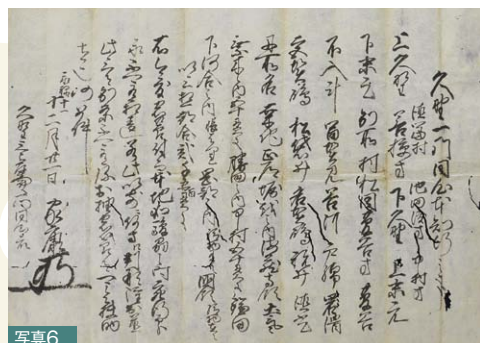


写真6

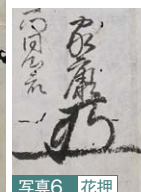


写真6 花押

徳川家康安堵状

永禄11年12月21日(1568)付で家康公が久野宗能に、久野一門の所領を安堵した書状です。久野一門の所領が久野地域だけでなく、磐田市鎌田、掛川市垂木、牧之原市勝田まで及んでいたことが分かります。

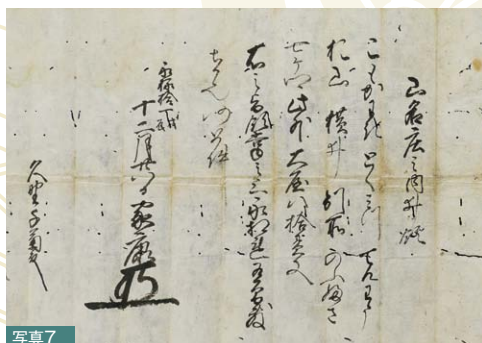


写真7



写真7 花押

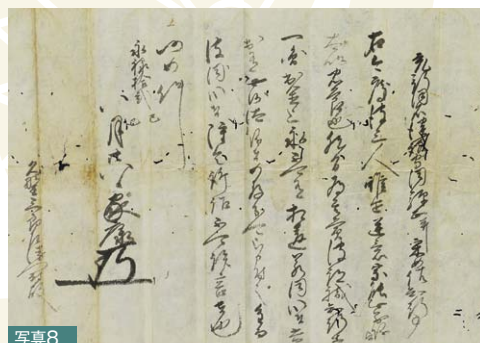


写真8

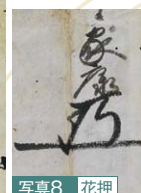


写真8 花押

徳川家康安堵状

永禄11年12月28日付で家康公が宗能の忠節に対して、子の千菊に対して所領を安堵した書状です。山名庄のうち薦ヶ脇、徳光、天王、松山、横井、別所、延久など今でも残る地名が見られます。

徳川家康感謝状

永禄12年8月28日付で家康公が発給した、宗能の忠節に対する感謝状です。この年一門の淡路守、弾正、采女が今川氏真方となったのに対して、宗能は家康公に忠節を尽くしたことが書かれています。

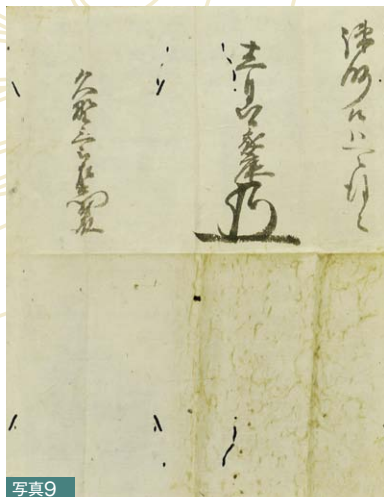


写真9



写真9 花押

徳川家康書状(断簡)

家康公が宗能に対して発給した書状の一部で、駿州や12月12日の日付が書かれているので、所領安堵状と推定されます。駿河の地にも所領があったのでしょうか。

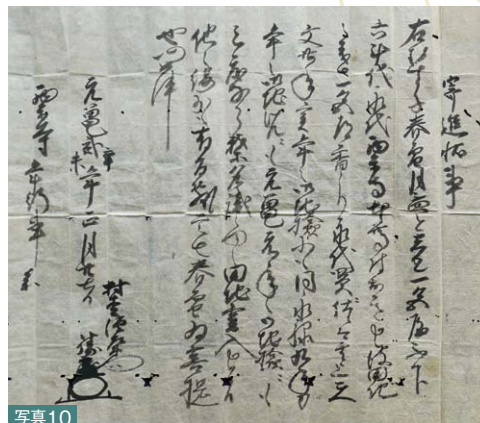


写真10



写真10 花押

村松勝孝寄進状

元龜2年(1571)正月27日付で宇刈7騎の一人村松勝孝が、西楽寺に一色やぶの田地を寄進した書状です。宇刈7騎のうち実在が確認できるのは、村松氏と穴山梅雪文書をもつ一色村富永氏だけです。おそらく久野氏と共に家康公の家臣になっていた時期があると思われます。(西楽寺蔵)

中遠の覇者本間氏と家康公

本間氏は本間氏家系図によると、^{むつ ちんじゆ ふしやうぐん}陸奥鎮守府將軍を務めた源頼義を祖とし、始めは^{しなの くに とき わ ごう}信濃国常磐郷に住んでいました。10代本間氏季は正慶2年(1333)足利尊氏に味方したことにより、山名郡高部郷地頭職を賜ったとされています。

戦国時代になると15代宗李と16代親李は今川氏親家臣となり、久野氏と共に久野城を守備したと記されています。17代氏清は家康公の家臣となり、永禄11年(1568)正月今川氏真の立て籠こもる掛川城攻の際、天王山で討死したとされています。氏清の後継者は丸尾氏より婿養子として迎えられた義清で、天正2年(1574)6月武田勝頼の攻撃を受けた高天神城西の丸で討死したとされています。しかし、高天神記などの別史料では義父氏清と共に西の丸で討死したとも言われています。義清亡後は家督を継いだ氏重は、勝頼家臣になり甲府に移り住んだとされています。

現存する古文書のうち元龜2年(1571)3月発給の家康公の所領安堵状写には、本間八郎三郎(義清)宛の名前が見えているため、元龜2年の時点では家督の相続がすでに氏清から義清へ行われていることが分かり、この文書から氏清は永禄11年掛川城攻で討死していたことが裏付けられると思われます。天正2年7月発給の武田勝頼の所領安堵朱印状は本間八郎三郎(義清)宛になっているため、義清は高天神城で討死しないで勝頼家臣になっていた可能性が指摘されます。また天正2年11月発給の勝頼の所領相続朱印状には、^{げん さ えもん}本間源右衛門(氏重)より^{いずみ かみ}本間和泉守(義氏)へ所領が相続されたことが記され、義氏は天正10年武田氏滅亡と共に討死したとされています。その後、本間氏の子孫は池新田村(現御前崎市)に帰農しました。

これに対して、天正2年7月に本間十右衛門尉(盛政、氏季の次男で氏清の弟)宛発給された家康公所領安堵状から、盛政は天正2年以降も家康に使えて一族の存続を図っていたことが分かります。さらに、原川浅間宮の天正17年(1589)在銘の鰐口と、富士浅間宮の天正18年在銘の棟札には不入斗在郷の本間源三郎の名前があり、袋井に残っていた本間一族がいたことが分かります。



写真11 本間氏館推定地

本間氏館跡の候補として、^{かけの うえ}掛之上遺跡の北東部分に16世紀中葉まで存続した空堀で囲まれた2区画以上の屋敷地と、掘立柱建物や門などが確認されました。

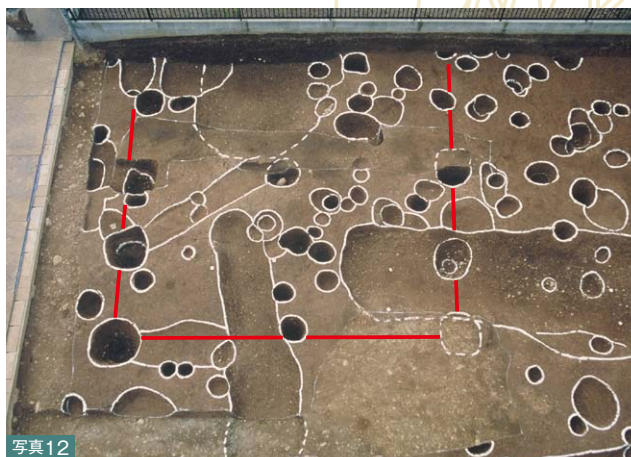


写真12 発掘調査で見つかった本間氏館の建物

掛之上遺跡の発掘調査で見つかった戦国時代の建物跡です。今の建物と異なり礎石のうえに柱を立てるのではなく、柱を地中に直接埋めた掘立柱建物といわれるものです。

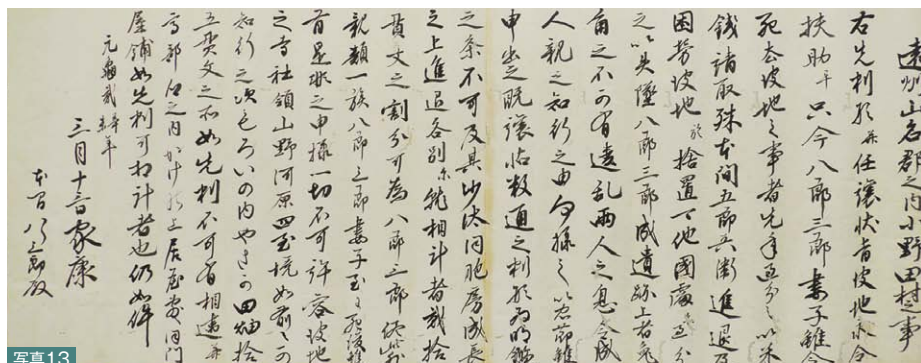


写真13

徳川家康朱印状写

家康公より元龜2年(1571)3月13日付で、本間八郎三郎(義清)に発給されたかけの上屋敷他を安堵する書状です。元龜2年には五郎兵衛(氏清)より義清に家督が移っていたことが分かります。(個人蔵)

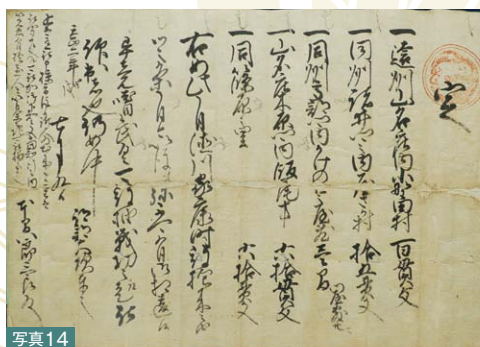


写真14

武田家朱印状

武田勝頼より天正2年(1574)7月9日付で本間八郎三郎(義清)に発給された、小野田村、やさか(谷坂)村、かけの上屋敷、木原郷内飯尾、篠原の領地を家康同様に安堵したと書かれている書状です。跡部大炊助(勝資)は武田信玄・勝頼親子に使えた側近の一人で、各地の大名や武将の取次役を務めています。(個人蔵)

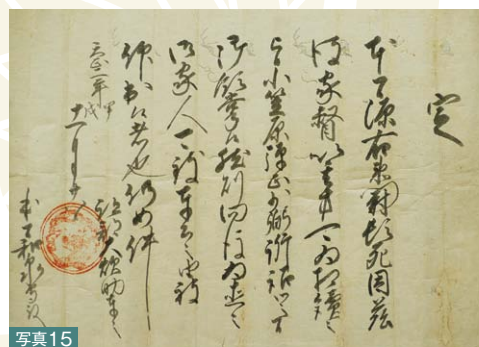


写真15

武田家朱印状

武田勝頼より天正2年(1574)11月28日付で、小笠原弾正少弼(信興)が訴訟した本間源右衛門(氏重)より、本間和泉守(義氏)への所領相続が認められたことが書かれています。この文書にも取次役の跡部大炊助の添書がありますが、領地安堵状と異なり末尾に朱印があり、内容により朱印の位置を変えていた可能性が考えられます。(個人蔵)



写真16

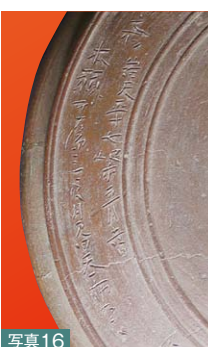


写真16

原川浅間宮鰐口 市指定文化財

天正17年(1589)5月吉日付で、現在富士浅間宮境内地に祀られている原川浅間宮に、不入斗郷にいた本間源三郎が施入したものです。源の1字がつくため、本間源右衛門氏重の子供の1人とも推測されます。月見里大工助九郎は、袋井市山梨にいた鋳物師の名前とされます。(富士浅間宮蔵)



写真17

富士浅間宮棟札

天正18年(1590)7月9日に建立した不入斗郷富士浅間宮の棟札で、表面に地頭本間源三郎の名前が書かれています。裏面には久津部郷の岩崎縫右衛門、三戸三郎四郎、野中三郎九郎が、馬を奉納したことも記されています。なお、家康公は同年8月には江戸入りしています。(富士浅間宮蔵)

南遠の雄小笠原氏と家康公

遠江小笠原氏のうち確実に実在した人物は、天文11年(1542)の華嚴院宛寄進状を残した小笠原右京進春茂です。春茂の子は氏興で天文13年(1544)の華嚴院宛寄進状、天文17年(1548)の龍巢院宛寄進状などを残しています。華嚴院文書を見る限り、天文13年高天神城主の代替わりがあったと思われます。この頃の小笠原氏は今川家臣で、小笠原氏より以前に高天神城主を務めていた福島氏に関わりのある一族とも推測されます。龍巢院の氏興文書の存在から、天文17年頃から馬伏塚城主も小笠原氏が務めていたと思われます。なお、龍巢院は華嚴院と並ぶ小笠原氏の庇護を受けた有力寺院として、勢力を保っていたことも古文書から読み取れます。

氏興の跡継ぎは氏助で、永禄12年(1569)龍巢院文書の寄進状では、小笠原与八郎と書かれています。永禄12年は家康公が今川氏真を遠江から追放した年で、氏助が家康公家臣となったことで、新たに寄進状を龍巢院に発給したと思われます。なお、龍巢院文書に使われている黒印と同じ文面の朱印が、本間家文書の信興書状にも使われていたことから、与八郎と信興が同一人物であることが分かります。天正2年(1574)本間氏と共に高天神城を守備していた氏助は、武田勝頼に降伏し武田家臣となります。この時弾正少弼の役職名と、信玄の一字をもらって信興と改名したといわれています。本間家文書の信興が家臣に宛てた高天神城からの退去命令書から、信興が高天神城や馬伏塚城を離れて駿府に移り住んだのは、天正5年(1577)12月以後であったと思われます。

天正2年7月高天神城を失った家康公は、大須賀康高に命じて小笠原氏の居城であった馬伏塚城を接收し、高天神城攻略の前線補給基地として改修しました。すでに武田家臣となっていた信興の法多山一乗院宛寄進状の日付は天正3年2月14日となっているため、康高が馬伏塚城の改修に着手したのは天正3年2月以後になってからと思われます。これ以後家康公は天正9年(1581)の高天神城攻略まで、勝頼が遠江に出陣すると必ず馬伏塚城を陣所としていました。大須賀康高はさらに前線基地を東に進め横須賀城を築城し、高天神城奪取に尽力しました。高天神城落城後も天正11年(1583)発給の龍巢院文書の所領安堵状で見るとおり、康高に対する家康公の信任は厚く遠江の安定支配の一翼を担っていました。



写真18 馬伏塚城遠景(南西より)

周りを湿地帯に囲まれた天然の要害地に築かれた平城です。小笠原氏の居館は北曲輪群にあり、南端の本曲輪群は当初あった寺院や墓道を改修し曲輪としていることが、発掘調査で確かめられました。内海や水路を利用した物資補給の城と推定されます。



写真19 高天神城遠景(南より)

落城を防げなかった武田勝頼が、滅亡する契機となった城であると共に、家康公が五力国を領有する大大名となる足がかりとなった城でもあります。城の西側には武田氏が改修した長大な横堀があります。

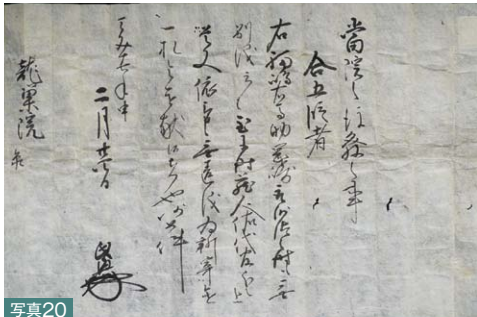


写真20



写真20 花押

小笠原氏興寄進状

氏興が天文17年(1548)に龍巢院に所領を寄進した書状です。氏興の勢力が馬伏塚城周辺にあったことが分かる史料です。(龍巢院蔵)

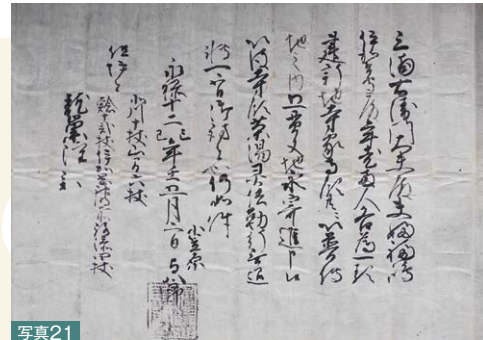


写真21



写真21 黒印

小笠原予八郎寄進状

氏興の子の予八郎(氏助)が、永禄12年(1569)に龍巢院に所領を寄進した書状です。与八郎とは氏助のこと、国人領主としては珍しく黒印が押してあります。(龍巢院蔵)



写真22

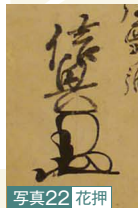


写真22 花押

小笠原信興諸役免除状

信興が天正3年(1575)に、法多山一乗院に諸役を免除した書状です。本文書にも小笠原弾正少弼と書かれており、信興が小笠原氏であることが分かります。(尊永寺蔵)

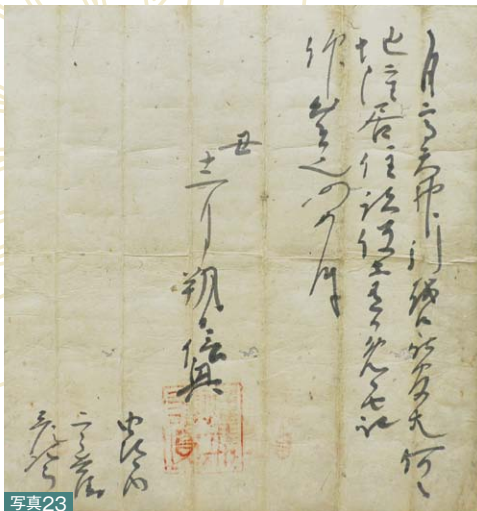


写真23



写真23 朱印

小笠原信興朱印状

丑年(天正5年(1577)か)12月1日付で信興より、由左衛門、二郎兵衛、彦次郎の3人の家臣に高天神城からの退去を命じた書状です。龍巢院文書の家康公家臣時代の氏助(信興)の書状にも同じ印面の黒印が確認されます。朱印に変えたのは、他の武田家重臣が朱印を使っていたことに合わせたと思われます。(個人蔵)

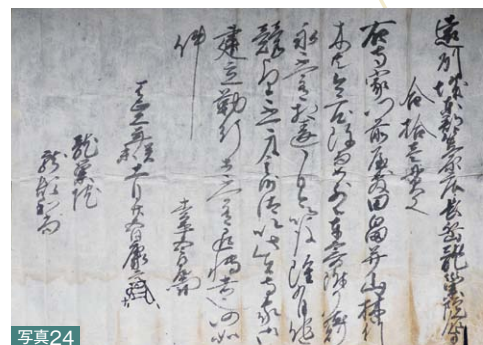


写真24

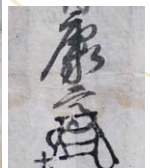


写真24 花押

大須賀康高寄進状

三河武士であったと思われる康高が、天正11年(1583)11月25日付で龍巢院に発給した寺領安堵状です。同様な書状は宗有寺にも発給されており、当地域における家康公の寺院に対する施策が伺われます。(龍巢院蔵)

家康公ゆかりの寺社

可睡斎の等膳和尚と家康公

可睡斎は戦国時代に当地域で曹洞宗発展の基礎を築いた如仲天間の弟子である大路一遵と、久野城主久野宗隆を開基とする曹洞宗の名刹です。また、可睡斎縁起では永正年間(1504~21)頃、久野城付近で如仲和尚が開いた庵跡を探り当て、開基したのが可睡斎ともいわれています。

家康公との関係では、興味深い伝承が残っています。家康公が竹千代と呼ばれた少年時代に、駿府の今川義元の元で人質として過ごしていた頃、岡崎にある家康公の父の墓参りに行かせるために、今川氏の菩提寺にいた等膳和尚が家康公を密かに清水港から船出させ岡崎に行かせました。そして、この時の恩に報いるため家康公が浜松城に入城した際、等膳和尚を城に招いたところ、和尚は居眠りを始めこれを見た家康公は和尚との親密の情を喜び「和尚眠るべ(可)し」といい、これにちなんで和尚の名を可睡と改め、可睡斎住職としたというお話です。この話が事実であったのか確かめる史料は残っていませんが、可睡斎には家康公を祀る高さ1mを超える位牌や、家康公の位牌所としての格式を示す屋根の棟を飾っていた三つ葉葵文の金箔瓦が残されていることから見ても、戦国時代に久野氏と共に可睡斎も相当重きをなした働きがあったことは間違いないと思われます。可睡斎は家康公と等膳和尚との強い因縁から、江戸時代を通じて三河、遠江、駿河、伊豆の四ヶ国の僧録司という僧侶の人事権を司る大きな権限をもつ大寺院となりました。



写真25



写真26



写真27

写真25 徳川家朱印状保管箱

家康公を始めとした、歴代の江戸幕府将軍の寺領安堵の朱印状を収めていた保管箱です。徳川家三つ葉葵の家紋が施された金蒔絵の豪華な書状箱と、可睡斎と書かれた外箱があります。(可睡斎蔵)

写真26 徳川家紋金箔瓦

金箔を貼るための下地の赤色顔料が残る徳川家紋の三つ葉葵飾りで、屋根の棟を飾ったものと思われます。金箔瓦は家康公を祀った東照宮などに見られることから、可睡斎が家康公の位牌所となっていたことを示すために、金箔瓦を使用したと思われます。(可睡斎蔵)

写真27 徳川家康公位牌

可睡斎本殿本尊に向かって右側に位牌所が設けられています。家康公の権威を示す高さ1mを超える巨大で立派な位牌は、安國院殿正一位徳蓮社崇善道和大居士の戒名が書かれています。正一位を朝廷から賜ったのは、家康公死後翌年の元和3年(1617)のことです。

真言宗の古刹西楽寺・法多山と家康公

西楽寺の寺伝によると奈良時代の行基による開基で、平安時代末期の阿弥陀三尊を本尊としている真言宗の古刹です。戦国時代では遠江における今川氏の祈願所として重きをなし、今川義元や氏真から寺領安堵の書状が残されています。

西楽寺記では永禄年間に武田信玄との戦乱で焼失した伽藍を、家康公の寄進により復興したことを伝えています。慶長5年(1600)関ヶ原合戦後天下統一の足がかりを得た家康公は、慶長8年(1603)將軍宣下を受け、一時豊臣家臣領であった当地での支配を揺るぎないものとすべく、寺領寄進の朱印状を西楽寺にも発給します。この朱印状によると西楽寺は、本堂の他学頭坊のほか松本坊などの坊院が6坊、三沢村林徳寺など末寺3ヶ寺を従えた大寺院であったことが分かります。

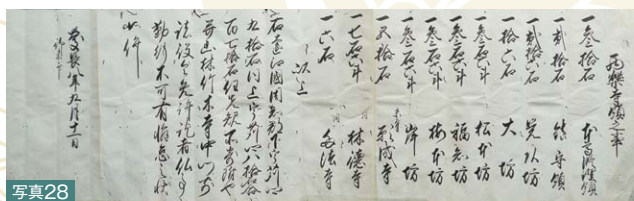


写真28

徳川家康朱印状写

家康公の2月の將軍宣下後半年たった、慶長8年(1603)9月11日付の寺領安堵の朱印状です。寺領は上・下宇刈郷にありました。(西楽寺蔵)

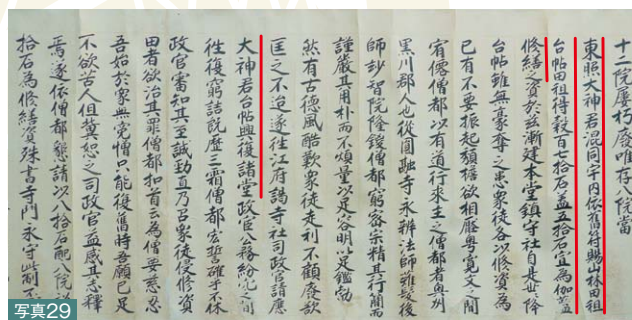


写真29

西楽寺記

延宝8年(1680)に書かれた、西楽寺の寺伝が書かれた文書です。武田信玄が攻めてきた時に失われた伽藍を、家康公が寺領を寄進し復興してくれたことが記されています。(西楽寺蔵)

法多山は神亀2年(725)行基によって開基されたと伝えられる真言宗の古刹で、正観音菩薩(秘仏)を本尊としています。西楽寺と同様に今川氏親、氏輝、義元、氏真、豊臣秀吉などの当地域の歴代の支配者の寺領安堵状を残しており、戦国時代に隆盛を誇っていた寺院であったことが分かります。

家康公の將軍宣下以前、慶長7年の寺領安堵の朱印状が発給されており、家康公が関ヶ原合戦後に早くも当地域の支配を確立しようとしたことが分かる朱印状です。天正2年発給の武田勝頼の寺領安堵状によると、家康公同様に寺領を安堵することが書かれており、この地域での家康公の影響力の強さを書状の文面から知ることができます。

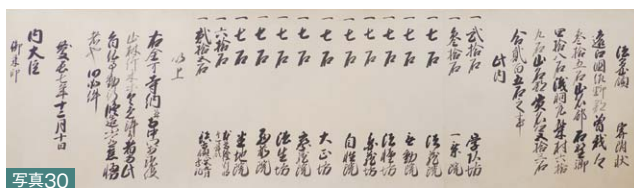


写真30

徳川家康朱印状写

慶長7年(1602)12月10日付発給、8院、4坊の坊院の存在が分かります。寺領は地元柴村のほか石野郷、貴名郷、市外では掛川市曾我郷など広範囲にありました。(尊永寺蔵)

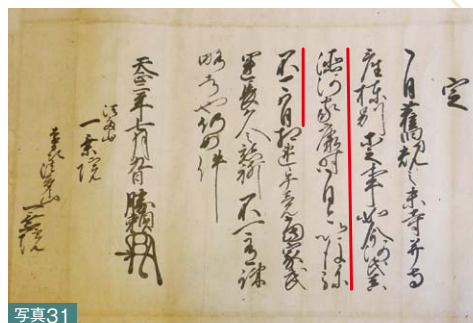


写真31

武田勝頼安堵状

勝頼が天正2年(1574)法多山一乗院に、家康公様にと記された所領を安堵した書状です。禁制文書ではないため朱印ではなくて花押が記されています。(尊永寺蔵)



写真31 花押

木原噺の戦と木原権現社

現在の木原にある許禰神社は、江戸時代には木原権現社あるいは熊野神社とよばれ、紀伊熊野神社から勧請されました。木原権現由来記によると大宝2年(702)文武天皇あるいは永保2年(1082)白河院の頃、木原郷の川の氾濫を防ぐために堤を造ったところ、熊野の使いである烏が集まり、熊野権現より水難予防の神として祀るようご託宣があったと伝えています。

由来記の戦国時代の記述によると、今は失われている今川義元・氏真社領安堵状の存在が確認でき、武田信玄との争いで衰退していた木原権現社を、家康公祈願のもと社領が安堵され復興したと伝えています。元龜3年(1572)10月信玄は突如として、浜松城にいた家康公を攻撃するため、当地域に進軍し久野城を攻めつつ木原・西島に陣を張りました。この時信玄は久野宗能が守備する久野城を落すことができず、木原の地でも徳川勢と武田勢が戦いました。この時の戦いが木原噺の戦いと言われています。なお、現在許禰神社境内に家康公腰掛石があります。慶長5年(1600)家康公が関ヶ原合戦に赴く途中、戦勝祈願のため木原権現社に立ち寄った際に腰掛けたとも言われています。実際に家康公が座ったものか分かりませんが、家康公と木原権現社の関係を広めるための伝承と思われます。慶長7年(1602)9月発給の家康公寺領安堵の朱印状は、將軍宣下以前の市内の寺社内で最も早い時期にだされており、木原権現社を重要視していたことが分かります。

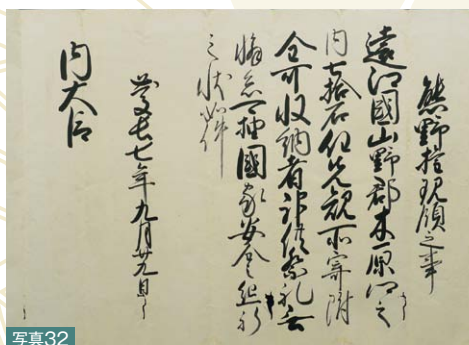


写真32

徳川家康朱印状写

慶長7年(1602)9月29日付発給の熊野権現領の安堵状です。木原郷内70石を所領していたことが記され、木原権現社の隆盛ぶりが伺われます。(個人蔵)

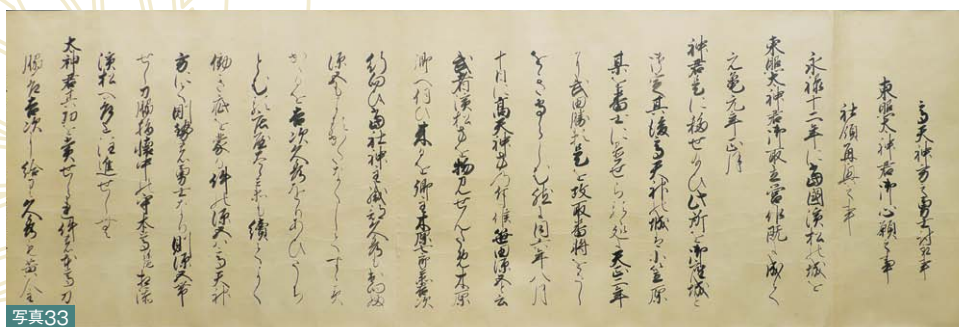


写真33



写真34

写真33 木原権現由来記

寛永19年(1642)神主の鈴木宇兵衛尉により書かれた長さ17mに及ぶ巻物です。木原権現勧請の由来から始まり、熊野信仰が広がっていく様、家康公との関係のほか、今は失われている今川義元・氏真書状2通が納められた史料価値の高いものです。(個人蔵)

写真34 木原噺の古戦場跡と家康公腰掛石

神社境内には家康公腰掛石がありますが、神社北東方向の水田の小字に、家康公が木原に陣を張った際に鍋を洗ったことに由来する「鍋洗い」の地名が残っています。

家康公の農村支配と七カ条定書

天正10年(1582)本能寺の変で織田信長が明智光秀に討たれ、その後主導権を握った豊臣秀吉と天正12年(1584)小牧・長久手の戦いで家康公は初戦の勝利を収めました。秀吉の巧みな懐柔策で和睦し、その後家康公は秀吉の家臣となりました。すると、秀吉は天下統一の総仕上げとして、関東の北条氏と東北の諸大名を屈服させるため関東・奥州仕置きを計画し、家康公にその先陣を命じます。家康公は天正17年(1589)三河・遠江・駿河・甲斐・長野の5カ国の村々に七カ条定書を発給し、年貢や夫役の取り決めを示し、領国内の農民を統一した基準で掌握しようしました。この施策により、関東・奥州仕置きの経済的備えとしたのでしょう。なお、この書状は領国内160ヶ所以上発給されていたことが判明しています。

写真35

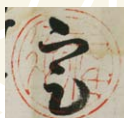
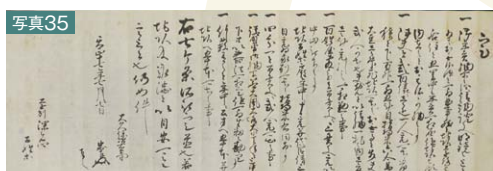


写真35 朱印

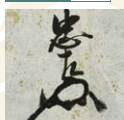


写真35 花押

徳川家七カ条定書(深見村) 市指定文化財

天正17年7月7日付深見村宛に発給され、文頭に徳川の福德の印、文末に代官の大久保忠佐の署名と花押が書かれています。忠佐は家康公重臣の大久保忠世の弟で、慶長6年(1601)2万石の沼津藩主となります。

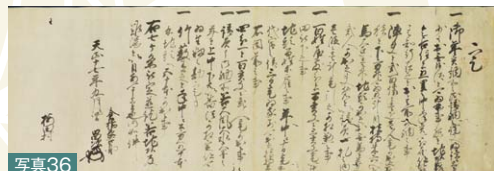


写真36 朱印

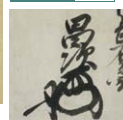


写真36 花押

徳川家七カ条定書(梅田村) 市指定文化財

天正17年9月4日付梅田村宛に発給された書状で、文頭に福德の印、文末に代官の倉橋昌次の署名と花押が書かれています。(梅山自治会蔵)

伊奈忠次による寺社支配

慶長5年(1600)関ヶ原合戦に勝利した家康公は、翌慶長6年寺社支配を確立するため、当地域の寺社に所領の証文を発給しました。袋井市内でこの時の証文が確認できる寺社をあげると、村松村神明社、宇刈一色村若宮神社、同松吟庵、大谷村雲谷寺、三沢村林徳寺、久津部村真福寺、菅ヶ谷村大明神、村松村油山寺、同神明社、山梨村天王神、梅田村浄林寺、平民村常楽寺、長溝村長光院、同八幡神社があり、すべて代官の伊奈忠次が署名しています。伊奈忠次は三河武士で、天正18年(1590)以後の家康公関東領国時代に代官頭を務め、新田開発、河川改修、利根川の付替工事のほか寺社対策にも敏腕を振り、徳川政権の財政基盤を固めた経済官僚です。



写真37



写真37 黒印



写真37 花押

林徳寺伊奈忠次寺領証文

林徳寺は三沢村にあった西楽寺末寺です。書式は統一され、寺領の石高部分に黒印、末尾に伊奈忠次の署名と花押が記されています。林徳寺は寺領5石で、今は廃寺となっています。(西楽寺蔵)

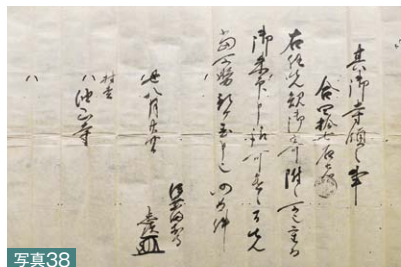


写真38



写真38 黒印



写真38 花押

油山寺伊奈忠次寺領証文

林徳寺証文と同じ書式で、寺領47石と大きな寺であったことが分かります。(油山寺蔵)

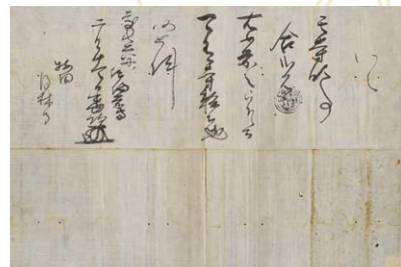


写真39



写真39 黒印



写真39 花押

浄林寺伊奈忠次寺領証文

現在も存続している梅山の常林寺の寺領証文で、2石の寺領が安堵されています。(常林寺蔵)

家康公がもたらした平和と北条氏重

久野城の最後の城主である北条氏重は保科正直の4男で、慶長16年(1611)家康公の命で北条氏勝の養子となり、名門北条(玉縄)家の名を継ぎました。氏重の母は久松俊勝の娘多却で、家康公の異父妹にあたることから、氏重は家康の甥にあたる人物です。

家康の縁戚である氏重は、下総岩富1万石の大名となったのをかわきりに、久野城主になったのは家康公が亡くなった3年後の元和5年(1619)のことでした。久野城にはそれまで、豊臣大名の松下之綱・重綱親子が城主を務めていました。久野城の発掘調査で氏重時代に本丸部分などの山頂部の大規模な破城を行い、山麓部を埋め立てて、建物も整備したことが確認されています。おそらく、豊臣政権時代の象徴である松下氏が建てた、本丸にあった天守や櫓、門などを破却し、かわりに政庁としての山麓部分の建物群を整備し、家臣を城内に住ませたと考えられます。つまり、氏重は秀吉政権から徳川政権に変わったことを、秀吉政権の象徴でもあった天守や櫓を破却することで示し、さらに戦乱の世が終わり平和な時代が到来したことを、領民や東海道を行き交う諸大名に知らせようとしたと考えられます。

氏重はその後田中城主を経て掛川城主となりますが、万治元年(1658)掛川城で死去しました。菩提寺は一度移転しますが現在は袋井市上嶽寺で、上嶽寺には氏重の墓所のほか、葬列図、肖像画、木像などが残されています。氏重には嫡子がいなかったため改易となりますが、江戸町奉行で有名な大岡越前守忠相の母は氏重の娘にあたります。



写真40

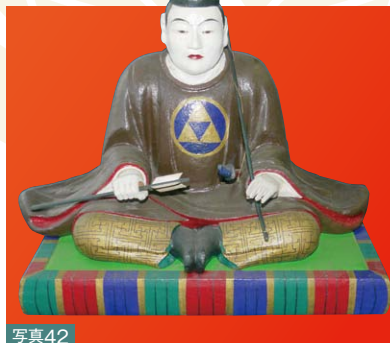


写真42



写真43

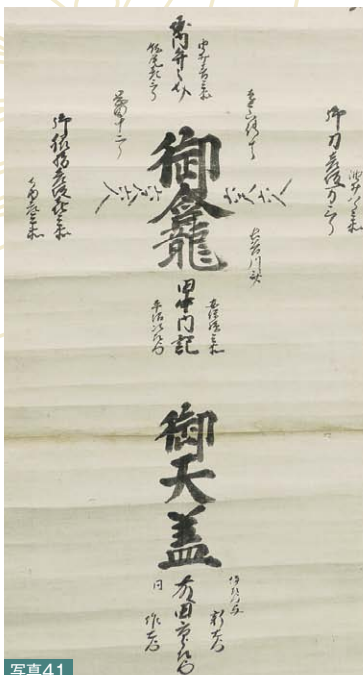


写真41

写真40 北条氏重肖像画

氏重の7回忌にあたる寛文4年(1664)に、家臣であった堀内隼人重勝が亡き氏重をしのいで上嶽寺に奉納した肖像画で、氏重を上嶽寺に改葬したことが、讃として書かれています。氏重の甲冑や旗印を知るうえでの資料として貴重です。(上嶽寺蔵)

写真41 北条出羽守氏重葬列図 市指定文化財

寛文4年堀内重勝が中心となり、氏重を元の菩提寺から再度現在の上嶽寺に改葬した時の葬列図です。最初の部分が欠損していますが、長さ6mにもなる長大な巻物で、近世大名の葬列を知るうえでの貴重な資料となっています。(上嶽寺蔵)

写真42 北条氏重木像

製作年代は分かりませんが、上嶽寺を開基した氏重を神像として祀ったものと思われます。弓と矢をもっているため、武人の姿をした神像として製作されています。(上嶽寺蔵)

写真43 北条氏重墓塔

上嶽寺墓地の最上段に3基の墓塔があります。中央塔が氏重、右塔が夫人、左塔が家臣の河野作十郎の墓石とされています。いずれも安政地震で倒壊し再建されることはありませんでしたが、破片から巨大な砂岩製宝篋印塔であったと思われます。

家康公戦いの地と伝説を訪ねて

このように袋井には馬伏塚城のような城跡や可睡斎などの寺社だけでなく、家康公が残した史跡や伝説の地があります。家康公の袋井に残した足跡を訪ね、別の面から見た戦国時代の歴史を知るうえで、ぜひとも訪れてみてください。

① 本庄山砦



極楽寺（館跡か）の裏山にある砦

久野氏らと共に家康公家臣となっていたと思われる、宇刈7騎の一人村松氏の居城です。発掘調査で本曲輪周辺に長大な横堀や、大規模な堀切が配されていることが判明し、戦国時代末期に徳川氏によると思われる大規模な改修が確認されました。太田川沿いに南下してきた武田の軍勢を向かい討つと共に、久野城の北方を固めていた重要な城であったと思われます。なお、戦国時代の遺物が城の南麓、現在の極楽寺周辺から出土しているので、ここに山麓館があった可能性が指摘されます。

参考文献「はるおか遺跡群」1998 袋井市教育委員会

所在地 袋井市春岡

②

西楽寺の家康公駒つなぎの桜



家康公駒つなぎの桜

家康公駒つなぎの桜（現在御衣黄）が方丈の庭に植えられています。西楽寺の北には本庄山砦があり、西楽寺には村松勝孝の文書も所蔵され、かつては付近に近世村松家墓所も存在したことから、西楽寺は村松氏との関係が深かったと思われます。家康公と信玄の戦いの最中、久野氏や村松氏が奮戦していたこの地域を守るために出陣した際に、家康公が西楽寺に立ち寄った由来を示す伝説かもしれません。

所在地 袋井市春岡

③

笹田源吾と長命寺



笹田源吾の供養塔

高天神城を守備していた武田家臣の笹田源吾が、徳川領を偵察すべく木原を通りかかったところ、木原権現社の神主木原吉次らに討ち取られました。家康公はたいへん喜び、吉次に感謝状を与えたとされています。その後、木原が災害や疫病に見舞われたことを源吾とたたきと考えたので、長命寺に源吾の供養塔を建て、念仏供養（木原念仏 市指定）を始めたといわれています。現在長命寺に残る供養塔には、戦国時代の宝篋印塔の部材が残されています。

参考文献「袋井市に伝わる昔話」1982袋井市農業協同組合

所在地 袋井市木原

④

可睡斎の六の字穴



現在の六の字穴

可睡斎には寺名の由来となった家康公と等膳和尚のお話以外にも六の字穴の伝説があります。家康公が武田信玄との戦いのなかで攻められ、可睡斎の裏山の洞穴に逃げ込んで難を逃れたという話です。この洞穴を家康公の公德をたたえて、「権現洞」または「出世六の字穴」と呼び、現在でも信仰の対象となっています。六という数字は、仏教の教えにある地獄などの六道世界、あるいは六観音や六地藏といった数字になぞらえているといわれています。

所在地 袋井市久能

5

家康公不入斗陣所

所在地 袋井市国本



富士浅間宮本殿

永禄11年(1568)家康公は武田信玄と計らい、駿府にいた今川氏真を東西から挟み撃ちにしました。氏真は重臣朝比奈氏の守る掛川城に逃げ込みますが、家康公は天王山砦などで包囲網を構築し攻撃しました。「三河物語」によると家康公は浜松城から出陣し、掛川城が最初に視界に入る不入斗の地に陣を張ったといわれています。当時は寺院や神社の施設を軍勢の臨時の駐屯地(陣所)とすることが常でしたので、不入斗の陣所は富士浅間宮であったと思われます。

卍

6

法多山の家康公
お手植えの松

所在地 袋井市豊沢



家康公お手植えの松

法多山尊永寺の庭に、家康公お手植えと伝えられる見事な松が植えられています。法多山は高天神城攻めの最前線の陣所である馬伏塚城のほど近い場所にあり、かつて戦勝祈願のために家康公が訪れたのかもかもしれません。西楽寺の駒つなぎの桜と同様に、家康公との縁を伝えるため、いつのころにか植えられた松であると思われます。

7

十二所館

所在地 袋井市諸井



館跡(現心宗院)

十二所館は発掘調査により南北130m東西85mの範囲で、堀と土塁に囲まれた中世寺院であることが分かりました。天正2年(1574)高天神城が武田勝頼の支配下に入った時、南側の堀中央に馬出状の出入口(虎口)が新たに造られ、虎口付近の堀底には木杭が多数打たれており、堀から虎口に攻め寄せてくる敵兵を防いだ施設と考えられています。寺にこのような施設はいらないので、馬伏塚城を築城している最中の、家康公の陣所として使われた可能性が指摘されています。

参考文献「十二所居館」2001 浅羽町教育委員会

8

岡崎の城山

所在地 袋井市山崎字岡崎



遠景(北西より)

馬伏塚城の南東、小笠山丘陵南西山麓端にあります。わずか二つの曲輪からなる小さな城ですが、鉄砲や弓矢を効率的に当てるための折れのある堀と土塁、北斜面には戦国時代最新の築城技術による横堀があります。城主は地元武将四ノ宮右近と伝承されますが、城の特徴は戦国時代末期を示すので、馬伏塚城や横須賀城と共に高天神城攻略のための遠州灘に通じる水路を利用した補給基地としての役割が考えられます。天正9年(1581)高天神城落城後は使命を終え廃城となりました。

参考文献「静岡の山城ベスト50を歩く」2009 サンライズ出版

9

横須賀城

所在地 掛川市西大淵



近世城郭としての横須賀城

横須賀城は武田勝頼に奪取された高天神城を攻撃すべく、天正4年(1576)以後家康公の命により、家臣の大須賀康高が築城した城です。馬伏塚城が内陸にあるのに対して横須賀城は湊が近くにあったため、兵士や兵糧を海上輸送する便のある前線補給基地として築城されたと思われます。現在の城は近世城郭として改修を受け、戦国時代の城の姿を見ることはできませんが、本丸、北の丸ぐらの範囲が戦国時代の城域だったと考えられます。

参考文献「静岡の山城ベスト50を歩く」2009 サンライズ出版

10

小笠山砦

所在地 袋井市掛川市入山瀬



笹ヶ峯御殿曲輪

永禄11年(1568)家康公が今川氏真家臣で高天神城主の小笠原氏助と、掛川城に逃げてきた氏真を分断するために築城されました。その後、天正7年(1579)武田の高天神城包囲の六砦が構築され、小笠山砦も改修されました。城は標高260m小笠山山頂にあり、笹ヶ峯御殿と呼ばれる本曲輪には横堀が巡らされ、東西の尾根筋には堀切により防御された多数の曲輪があります。六砦の中では一番規模が大きく、家康公の陣所として使われたといわれています。

参考文献「静岡の山城ベスト50を歩く」2009 サンライズ出版



図中の①⑩番号は13、14ページの番号、(P0)は本文中のページ数と対応しています。寺院・神社や個人が管理している場所もありますので、一言ことわってからお訪ねください。

徳川家康公関連城跡・寺社

協力者 可睡斎／西楽寺／上嶽寺／常林寺／尊永寺／富士浅間宮／龍巢院／油山寺／
木原とみ子／本間周

参考図書 袋井市「袋井市史通史編」1983年／袋井市「目で見る袋井市史」2001年／袋井市
教育委員会1998「はるおか遺跡群」／袋井市農業協同組合1982「袋井に伝わる昔
話」／浅羽町「浅羽町史通史編」2000年／浅羽町「図説浅羽町史」2001年／加藤
理文・中井均編「静岡の山城ベスト50を歩く」2009年サンライズ出版／増田又右
衛門・実編「高天神城戦史」／久野城址保存会「久野城物語り」

開催期間 平成27年11月8日(日)～12月18日(金)

編集・発行 袋井市歴史文化館

〒437-1192 静岡県袋井市浅名1028番地(浅羽支所内)
TEL.0538-23-9269
ホームページ <http://fukuroi-rekishu.com>

